

『1968』上・下

いま「あの時代」を真摯に検証する意味とは？

小熊英二

おぐまえいじ／1962年東京生まれ。東京大学教養学部社会科学文化研究科国際社会科学専攻大学院博士課程修了。慶應義塾大学総合政策学部教員。「単一族神話の起源」「日本人」の境界」「民主」と「愛国」等。

評者 北田暁大

全共闘運動を中心とする「1968」年前後の叛乱を、「過去の英雄譚や活劇物語」として回顧するのではなく、史資料に基づき「社会科学的に検証」することを目的として書かれた大著。65年の慶大学費値上げ反対闘争を起点、72年の連赤事件を終点に設定し、東大闘争、日大闘争、高校闘争、ウーマンリブなど様々な形をとった闘争の歴史が、千頁を超える二つの巻に描かれている。本書の膨大な記述を要約するのは難しいが、全体を通して提示



新曜社 各6800円十税

されている歴史観は極めてクリアである。つまり、「1968」とは、高度成長を経て先進国化しつつある日本において姿を現してきた、現代的な生きづらさ——アイデンティティの不安や閉塞感など——に直面した若者たちの反応であった、と。「1968」を、一過性の風俗現象に過ぎないと斬り捨てる議論にも、文化革命と捉える議論にも与することなく、あの時代を生み出した社会背景を探り、その可能性と限界を指摘する。その問題意識は、若者の生きづらさが社会問題化しつつある現在、きわめてアクチュアルなものといえる。

みには、困難が伴わざるをえない。「解釈である」という逃げの手を打たず、正面から「細部の事実関係の確認」に切り込むという本書のスタイルは、当事者が差し出す異議を引き受けるという覚悟のうえに成り立つものだ。個々の読者が、本書が提示する膨大な歴史記述を、当事者たちからの異議と突合せながら、可能な限り原資料にあたり、「1968」の像を築き上げ、世代と立場を超えて相互にその像をつき合わせ、複眼的な歴史観を形成していくこと。その複数の歴史観が交差するところから、現代社会の生きづらさを克服する道筋を探る思想と実践が生まれることをこそ、本書は願っているように思える。

きただあきひろ／1971年生。

東京大学大学院情報学環准教授。著書に「嗚う日本の「ナショナルイズム」等。「思想地図」編集委員。